



先生、あのね。一

---

■先生、あのね。

この度、投票にて、学級委員長に選出されました家入明子（27）です。これから、クラスのみんなと楽しい学校生活をおくれるよう、責任をもってクラスをまとめていきたいと思います。どうぞ宜しくお願いします。

さて、先生もご存知かと思いますが、このクラスには色々と噂の多い家入一真君（31）という問題児がいます。彼には、以前から何度となく生活態度を改める様注意してきましたが、不健全な生活を改善しようという姿勢が一向に見られません。

事実、今日も家入君は学校に遅刻してきました。明るくなる前には登校しなければならないという校則があるにも関わらず、ここ数ヶ月、彼はその決まりをほとんど無視し続けています。また、もー君（8）や夢見ちゃん（4）と朝の給食を食べている最中に、ふらふらとした足取りで学校へやってきては、応接室のソファに倒れ込み、給食も授業もそっちのけで眠っています。大体いつも、お酒か吐瀉物の匂いをぷんぷんさせています。

3組の山田さんが、家入君は、街で飲食店のアルバイトをしていると噂していました。4組の高岡さんは、家入君は洋服屋でアルバイトしているって言ってました。夜の六本木でテキーラを瓶で飲んでしていると噂していたのは5組の中林君です。はやりのツイッターには、キャバクラを覚えて激痩せしたと書かれていたのも見ました。だけど私が見たある日の家入君は、口数少なに黙々とパソコンに向かってキーを打っているオタクでした。果たして誰の話が本当の家入君なのでしょう？

（ちなみに、夜の六本木にいた家入君を見た5組の中林君はそこで何をしていたのでしょうか、補導されるべきだと思います。）

家入君の実態はつかめませんが、仮に全ての噂が本当だとすると、アルバイト活動とアルコール活動が忙しいから、家入君は学校にいつも遅刻するんだと思います。

クラス一のムードメーカーのもー君は、たまに家入君がふらりと学校へやってくると、「わあ！家入君、よくきたね！ほら、委員長！今日は家入君が学校にいるよ！嬉しいねえ！楽しいねえ！」としきりに喜んで見せ、周囲を和ませようとします。私はそんなもー君の心意気を汲んで、家入君の首根っこを掴んでもー君の見えないところに呼び出してから、委員長としてすべき話をし

ます。

「家入君、今何時だと思っているんですか。登校時間はとっくに過ぎていますよ、そんなことしているとクラスの風紀が乱れますし、あなただって停学になりますよ。」

家入君は、「はい。ごめんなさい。オエッ。本当にごめんなさい。ウェッ。」と焦点の定まらない目を泳がせながら、今にも嘔吐しそうな顔色でひたすら細々と謝罪します。それから、一通りお説教が終わると、たいていいつも、クラスのアイドル、夢見ちゃんのところへ行って慰めてもらっています。

「いいんだよ～、大丈夫、大丈夫」夢見ちゃんはいつも、家入君に優しく声をかけてあげます。

私はこのクラスの委員長として、家入君をなんとか健全な生徒に更生させたいと思います。現状から言って、週に1度や2度、あるいは3度、最悪4度くらいの遅刻には目をつぶらなくてはいけないかもしれません。

しかし、今の出席状況からいって、家入君の来年の進級は極めて微妙な状況ですし、肝臓の状況からいえば、人生という学校から退学になる日もそう遠くないかもしれません。大事なクラスメートである家入君が一日も早く健康な生活を取り戻してくれるように、学級一丸となって取り組んでいきたいと思います。

それにあたり、当面はこの学級日誌に私、学級委員長、家入明子が、家入君の一挙手一投足を、こと細かに記していきたいと思いますので、先生からもどうぞ、厳しいご指導を宜しく願います。

それでは、今日はこの辺で。

学級委員長、家入明子。

## 先生、あのね。二

---

### ■先生、あのね。

こんな話を聞きました。

3組の学級委員長よしこさんが、同じく3組のよしお君の遅刻があまりにも目にあまるので、ある日、よしお君が千鳥足で教室のドアを開け、アルコール臭を漂わせながら教室に入ろうとしたその瞬間に、思い切りバケツ一杯の水をぶっかけた、というのです。よしこさんのクラスでは厳守すべき登校時間は朝の5時、と決まっていたそうですが、よしお君は、六本木周辺で酔い潰れて眠っているところを頻繁に目撃されている、これまた不健全な児童でしたので、どうしても登校時間を守ることができなかつたようです。

「あんたっ！またそんなになるまで飲んで！一体今、何時だと思ってるの！」

「おれえがふぁせ～だふぁねでいくらのんもう～がおりえのかってであるおう（俺が稼いだ金でいくら飲もうが俺の勝手だろう）」

「この、バカっ！」

で、バケツの水バシャー！っという、一見、昭和初期かと思紛うような児童間のやりとりが、平成のこのご時世に、ましてや東京という近代的な都市において、尚も健在だという驚愕の事実

。

先生は私が嘘を言っているとお思いでしょうか？

残念ながらこれは、ごく日常的な、何ら珍しさのない、起こるべくして起こる、水害です。よしこさんと同じく、問題児の行動で日夜悩まされている学級委員長、つまり私としましては、我がクラスの問題児、家入君に、バケツの水をぶちまけたことこそないものの、次こそは、次こそは、と機をうかがっているというのが現状です。ただ、一方で、思い切ってぶちまけた後の水の処理という現実的な問題を思うと、どうしても二の足を踏んでしまうというのもまた事実です。

水の処理、といえば先日こんなことがありました。

朝方、私が学校へ登校するや否や、クラスのムードメーカー、モー君が私に駆け寄り、動揺を隠せない様子で言うのです。

「委員長、家入君が、教室でおしっこしちゃった。。」

モー君、いくらなんでもおふざけがすぎますよ、と、当初はまともに取り合わなかつた私ですが、教室の、まさに家入君の座席の真下の床を見て、言葉を失いました。そこにはまさに、”水害”が起きていたのです。

そもそも私は学級委員長、という立場上、年少者の粗相の後始末は何度となく行ってきました。モー君や夢見ちゃんがオムツからパンツに移行する当時など、床の上の水たまりに直面するのも日常茶飯事でしたから。ところが、こと大人の粗相となると事情がずいぶん違ひまして、まさにバケツの水がひっくり返ったような大洪水です。ぎょっとしてあたりを見回すと、制服を上半

分だけしか着ておらず、下半身はノーズボン、ノーパンツという状態で、床に突っ伏して眠っている家入君の姿が。この全てを理解するにはしばらく時間が必要でした。が、モー君が事実を言っていた、ということ次第に理解するにつれ、私の中にはふつつつと、家入君に対する、ある思いが沸き上がりました。

……本来、私が制裁として起こすはずだった水害を、なぜ先に、しかもなぜ自発的に起こすというのか！！！

私は日頃から暴力には反対しています。が、そのときばかりはつい衝動的に、どうぞどうぞ、さあどうぞ、といわんばかりにこちらに向けられている家入君のお尻を、右手でバシッとカー杯叩きました。すると、それまで俯せで寝ていた家入君が、「はぁ〜？」と大変にふてぶてしい声を発し、顔をこちらに向けました。「なんですかそのふてぶてしい態度は！自分のしたことを分かったのことでですか！」と一気に非難の言葉をまくしたてようとしたそのとき、家入君の顔を見て、私は再びの衝撃を受けることに。。なんと、彼の口元から顎にかけて、ややパール感のある紫色の口紅が、べっとり、ねっとり、さながら家入君の顔面に喰らいついたかのような生々しい後を残していたのです……！

ナチュラルメイクが主流のこのご時世に、そもそも一体誰がこんな悪趣味な口紅を！！そしてそんな悪趣味な口紅をつけた女性と、家入君は一体、どこで何をしてきたというのか！！！

タイミング的には今こそ私がバケツに水をくんできて水害を起こすべきときでした。が、残念ながら家入君はそのときも尚、泥酔状態から覚めやらず、水を一杯や二杯ぶっかけたところで、まともに話ができるはずありません。また、私たちの教室の床は水濡れに大変弱い材質でできているので、水滴が落ちたまま放置しておく、すぐ白く変色してしまいます。「来たときよりも、美しく」、先生、これが今月の我がクラスの”めあて”であったことを、私は決して忘れませんでした。家入君に水をかけてやりたい気持ちをぐっところえ、私は使い古しのバスタオルを持ってきて、家入君の起こした水害を、奇麗に処理しました。それから、数時間、家入君に睡眠とアルコール消化のための時間を与え、さすがにもういいだろう、という頃合いを見計らって、再びお尻をパシン、パシンと数回叩いて覚醒させました。

「家入君、授業中の居眠りは原則として禁止です。が、この際そんなことはどうでもいいです。あなたがなぜズボンとパンツをはいていないのか分かりますか。」

目を覚ましたばかりで事情がさっぱり、という表情の家入君に、私は問いかけました。

「へっ、え、え?!あれ、なんで僕、ズボン履いてない?!」

素っ頓狂な声を上げる家入君。

「それから、今すぐ鏡で自分の顔を見て来ててください。」

股間を両手で隠しながら、ふらふらと鏡を見に行く家入君。

「えええええ！！！」

鏡の方から声にならない声がしました。

そこで、戻ってきた彼に、私は全てを、冷静に、淡々と話しました。

「おしっこしたことは全く記憶にございません。口紅は渋谷のバーのドラッグクイーンによるものです。本当にすみませんでした。」

家入君は深々と謝罪した後、「むしろ自分で拭きたかった。。。」とぼつりと付け加えました。

夢見ちゃんはそのときもまた、自分の無意識の行いを恥じ、悶絶している家入君に、「大丈夫、大丈夫だよ～」と優しく声を掛け、頭を撫でてあげました。モー君は、「家入君のおしっこは全然臭くなかったよ！家入君がいつもつけてる香水と同じ、いい匂いだった！」と的外れな発言で、彼なりに家入君を慰めました。

そして学級委員長である私は、この一部始終を包み隠さずツイッターで発表し、フォロワーを200人増やしました。

家入君の更生への道はまだまだ遠い様ですが、今後とも先生のお力添え、宜しく願い致します。

それでは今日はこの辺で。

学級委員長、家入明子。

## 先生、あのね。三

---

### ■先生、あのね。

先生、私は先生に本当のことを打ち明けます。

9年程前、私と家入一真君は、恋愛関係にありました。

学生という立場にありながら、行き過ぎた行為だったと、今では深く反省していますし、ましてや学級委員長となった今、その過去は誰にも打ち明けてはならないものだと、今の今まで、ずっと私の胸の中にしまい続けてきました。

けれども私は、本当のことを打ち明けることにしました。私と彼が過ごした日々のこと。9年前の彼のこと。なぜなら、先生に少しでも知って頂きたかったからです。

.....彼が、昔から今の様に酒浸りでなかった、ということ。

そもそも、私と家入君との出会いは10年前の夏でした。「ご近所さんを探せ！」という、今言うインターネットの出会い系サイトで、私と家入君は知り合いました。

.....せ、先生っ、誤解しないでください！！私は決して不純な動機で出会い系サイトに登録していたわけではないんです！もしかしたら家入君は不純な動機で登録していたかもしれませんが、私は違います！

インターネット、IT、という単語が、やっと世間に広まりだした当時、我が家にいち早くやってきたキャンビー98というパソコンで、私はどうしてもポストペットが飼いたかった...。ピンクの熊、モモちゃんにメールを運ばせたかったんです。ソネットに申し込まなければモモちゃんを飼えないと思っていましたから、もちろんプロバイダはソネットにしました。人差し指で探り探りキーを打って、インターネットに接続、メーラーも準備万端、誰かがモモちゃんにメールを持ってきてくれるのを待ちました。けれども待てど暮らせどメールはこない...。それもそのはず、私のメールアドレスを知っていたのは、世界中で私一人だったからです。相手がいなければメールはこない、そこでEメールを使うには、といった具合に銘打たれたハウツー本を読み込んでみますと、「ご近所さんを探せ！」に登録するよう指南してありましたので、私は素直にそれに従った、それが全てのいきさつです。

.....するとどうでしょう。当時17歳だった私のもとには、日本中のハングリーな中年男性からのメールが、集まる、集まる。あまりに過酷な労働を強いられるモモちゃんに不憫さを感じるほどでした。

そんな中で、「芸術の話をししましょう」と一言だけ書いたクサイメールを送ってきたのが、当時21歳だった、他ならぬ家入君だったというわけです。数回メールを交わすうちに、話の内容というよりは、彼の言葉選びのセンスに惹かれ、私と家入君はとても仲良しになりました。結婚し

たのは、その1年半後です。

私と家入君は、当時、福岡県は薬院の、1ルームマンションに二人で暮らしていました。私はジャズシンガーを夢見て音楽を学びながら、夜はロイヤルホストの厨房でアルバイトを。家入君はプログラマーとしてIT企業に雇われていたサラリーマンでした。（ちなみに、我が校の姉妹校であるペパボ学院の現学級委員長、佐藤健太郎君は、当時のうちから歩いて5分の、偶然にも同じ町内に住んでいたご近所さんでした。）

先生、とても信じられないこととは思いますが、家入君は当時、お酒を全く飲めない体質だったのです。少しでも飲酒すると、すぐに顔が赤くなり、気持ちが悪くなるというので、お酒よりコーラを好んでいた程です。そんなわけで、今でこそ、ビジネスにおける人との出会いは夜の六本木、銀座、西麻布でお酒は欠かさない家入君ですが、当時、初めて佐藤健太郎君と会った日にも、二人が向かった先は、吉野家でした。

お酒の代わりに、家入君が当時すっかり没頭していたのは、シーマンです。

水槽の中の人面魚がふてぶてしく話しかけてくる、一世を風靡した育成ゲーム、シーマン。当初、私が家庭に導入したはずのシーマンを、気付けば家入君がすっかり気に入って、テレビにかぶりつく様にして育てていました。そして、ある朝、私が布団の中で目覚めたとき、家入君はテレビの前に座り、ゲームのコントローラーを握りしめて、肩を丸めて泣いていました。

「シーマンが、死んだ。。。」

ときには夜中、突如布団から飛び起き、家中の電気をつけて回り、  
「リングの貞子が出てくる夢を見た。。。」  
と真っ青な顔をして震えていることもありました。

バーチャルな生き物の一生に、あれほど綺麗な涙を流すことができた家入君。  
バーチャルなお化けをあれほど恐れていた家入君。

先生。あの頃の家入君は確かに、心の美しい、そして肝臓も美しい、汚れのない青年でした。

家入君があ那时的優しい気持ちを思い出してくれるその日まで、私は誠心誠意、学級委員長として努めようと思います。

それでは、今日は、この辺で。

学級委員長、家入明子。

## 先生、あのね。四

---

### ■先生、あのね。

先生、今日は家入君が、遅刻してきませんでした。  
朝方、5時頃には、きちんと学校に登校してきたようです。

今、やっとこの学級日誌でもって私の頑張りが諸先生方に認められ、学級委員長、家入明子はまさにこれから、そう、これからというときに、あえて遅刻をしないで登校してくる、家入君。先生、良識のある大人であれば、今このタイミングで当然のように、大遅刻、大酒、大虎……バックナンバーを顧みればもういっそ大便くらいの後押しがあっても良いのではないのでしょうか。家入君が今、健全な児童になったところで一体全体誰得……はっ、なにっ、なんですかっ、いやっ、ぎゃああああああああああ！！！！

……先生、たった今、委員長たるべき私の中に邪悪な悪魔が宿りました。しかし直ちに先日、授業で教わった不審者への対応、すなわち”いかのおすし”を実践しましたので私は無事です。”いかない”、”乗らない”、”大声で叫ぶ”、”すぐ逃げる”、そして”しらせる”。学校での学びは、今日も私を救ってくれました（感謝）。

ところで先生、先生もご存知の通り、我が校の校則第32条では、生徒の基本的な身だしなみに関し、このように定められています。

「本校男子生徒が下着を購入する際は、どうしてもやむを得ない場合を除き、優先的、かつ積極的にファストファッションを利用すること。（無印良品までは可）」

先生、家入君が、“DOLCE&GABBANA”と書かれた見覚えの無いボクサーパンツを履いていました。停学処分が妥当です。

学級委員長、家入明子。

先生、あのね。五

---

■先生、あのね。

先生、こんにちは。

昨日雨が降ったせいか、今朝は通学路の紫陽花がとても美しく咲いていました。学校では喉の風邪が流行っているようですが、モー君はややお腹をこわしています。夢見ちゃんはこの暑さに多少疲れ気味です。私は葛饅頭を3つ食べました。みんな楽しく、穏やかに過ごしました。

それでは今日はこのへんで。

学級委員長、家……ちよっ、ちよっと家入君、やめてください、人の日誌を勝手に覗かないでください、勝手に読むなんて卑怯なこのゲスっ……え、せ、せめてトイレ行った手は洗って出直してっ……え、何ですか？ああ、僕の記録がない？ああ、言われてみればそうですが、言われなければ気付かないところでした。何しろあなたはあまりに遅刻、欠席が多い上に注意しても改善しようとしませんので、ついに興味、関心を失ってしまっていたようです……え？……えええ？……”思い出して、僕に興味を持っていたあの頃を”……？いきなりそう言われましてもそれはちょっと今となっては無理難題で……え？……”簡単に諦めるな、きっとやれる”……？なんでそんなふてぶてしい上から目線で……え？

”だって、投票で選ばれた、委員長だろ”……？

先生、家入君にまだ興味を持っていたあの頃のことをお話しましょう、学級委員長、家入明子です。

それはある夏の日のこと。我が校と提携している某幼稚園にて、幼児達を対象とした、ちょっとしたお祭りが開催されました。幼児達は、焼きそば、ポップコーン、綿菓子、ジュース、等と書かれたカードを持って、我々年長者の運営する露天を周り、お金の代わりにそのカードを差し出します。すると、お店の人がスタンプを押してくれるので、それと引き換えに品物を受け取ることができるという、ちょっとしたお買い物ごっこの様な、幼児達がとても楽しみにしているお祭りです。

その日、家入君は幼児達のために焼きそば係をやることになりました。焼きそば係は、各クラ

スの問題児を含む男子数名から構成されており、各々役割分担がありますけれども、何しろ家入君は怖くて包丁を握れませんので、この日も当然の様に、積極的にスタンプ係をかって出ました。幼児のカードにスタンプを押し、パック詰めされた焼きそばを手渡す係です。

ツーブロックにカットされた頭には水色の三角巾、優しさをアピールするエプロンも忘れずにつけました。（衣服が吐瀉物で汚れるのを防ぐためではありません。）

さあ、楽しいお祭りの始まりです。

幼児達が続々と焼きそば屋さんの前に列をなし、家入君にカードを差し出して言います。

「やきそば、くださーい。」

「スタンプ、おしてくださーい。」

家入君は応えます。

「はーい。スタンプ押します。カードに押しますか、……それとも君のおでこに押してやろうか……」

「……。」

幼児達は入れ替わり、立ち替わり家入君の元へやってきては、ぬるいジョークに難しい顔をして、焼きそばを受け取ると皆一様に、足早にその場を去っていきます。見かねた幼稚園の先生が、そっと家入君の側へ行き、声をかけました。

「……家入君、そろそろ焼きそばを焼く係と交替しましょう。」

しかし家入君は自分の仕事に誇りをもっていましたから、確固たる面持ちで答えました。

「いえ、大丈夫です。僕はスタンプ係やります。」

「遠慮しないで、せっかくですから、焼いてみませんか。」

「いいえ、僕はスタンプ係で。」

幼児達と同様に、今度は先生が難しい顔をして、その場を去っていきました。

そんな中、今度はお父さんに手を引かれた一人の男の子が、家入君の焼きそば屋さんにやってきました。

男の子は、元気な声で言います。

「やきそば、くださーい。」

さあやるぞ、これが男の仕事だぞ、家入君は決意も新たに、意気揚々と言いました。

「はーい。スタンプ押します。カードに押しますか、……それとも君のおでこに押してやろうかあっ……！」

すると、隣にいた男の子のお父さんが、おもむろに一言。

「……いや、おでこはちょっと。困るんで。」

その瞬間、家入君は静かに俯いて、そして応えました。

「……ですよね……すみません。」

この日、外敵から子を守る親の愛、そして大人社会の厳しさ知った、家入君でした。

それでは今日は、この辺で。

学級委員長、家入明子。

## 先生、あのね。六

---

### ■ 先生、あのね。

先生、上級生のミユキ先輩から体育館裏へ呼び出されたのはつい先日のことです。

必ず一人で来る様にとのことでしたので、言われた通り、言われた時間、言われた場所に一人で参りますと、そこには紐の様なものを右手にしっかりと握りしめた、仁王立ちのミユキ先輩の姿がありました。

「先輩、お待たせ致しました様で申し訳ありません。さて今日はいかがなさいましたでしょう。」

先輩の顔に、何かとてつもなく鬼気迫るものを感じましたので、私は恐る恐る尋ねました。すると、先輩が言いました。

「.....アンタ。聞けば学級委員長さんだって言うじゃない。」

「はい。その通りです。私は学級委員長、家入明子です。」

すると先輩は、コーラで脱色したと専らの噂の金髪、ワンレンの長い髪の毛を、額のあたりから左手でばさっとかき上げ、眉間に皺を寄せると、きっぱりとした口調で、こう言うのです。

「.....アンタ、馬鹿？」

「.....えっ！！??」

思わずたじろぐ私、しかしそんな様子を気にも留めず、先輩は続けました。

「アンタに教えてあげるわ。アタシはね、3年9組の、裏番よ。」

「えっ！！.....裏番とは何でしょう!？」

「裏の番長だよ、馬鹿な子だね！！.....学級委員長だなんだって、最近やたらいい気になってるアンタのために言っというやるけどね。委員長なんてもんはね、なんてことはない、ただの"はずれくじ"なんだよ!」

「ええっ.....は、は、はずれくじ?!」

先生、このときの私は、まさに頭のとっぺんに雷が落ちてきた様な衝撃を受け、ただただ呆然

と立ち尽くしていました。ミユキ先輩は一体全体、何の恨みがあって私にそんなことを……。はずれくじ、とは一体全体どういう意味なのでしょう……。混乱する頭に、ミユキ先輩の声が畳み掛けます。

「……そう、はずれくじよ。委員長なんて言われてちょっと先公にチヤホヤされるくらいで、結局はクラスのためにただ働きさせられる雑用係ってことよ！」

「ただ働き……雑用係……！？ミ、ミユキ先輩、委員長の仕事は決してそんなものではありませんっ！」

「そんなもんなんだよっ！……その証拠に、アンタ、右手に何も握ってないじゃないのさ。アタシの右手を見てご覧。……この紐が何だか、アンタには分かんないでしょう……？！」

「そ、それはっ……確かに先輩の紐は最初から気になってはいましたが……くっ、わかりませんっ……一体、何なのですか、それは……。」

「これはね……。」

ニヤリ、と不適な笑顔を浮かべて、ミユキ先輩は誇らしげに言いました。

「3年9組学級委員長、川中島マサルの財布の紐よ！！」

「さ、財布の紐……！？」

「……アタシはね、3年9組の裏番として、委員長・川中島マサルの言動を陰で操ると同時に、こうして日夜、マサル財布の紐すらも握ってるってワケ。ところがアンタはどう？……ふふ、委員長なんて名ばかり、お宅のクラスの問題児なんて、まるでノーリードで野原に放たれたお犬様じゃない、アッハッハッハ！厄介な雑用ばかり押し付けられて、何の力も持たない学級委員長、てんでお笑いだわっ！アッハッハッ！」

勝ち誇ったかの様に高らかに笑うミユキ先輩……しかし、私はここで負けを認める訳にはいきませんでした。なぜなら、なぜかって、それは私が、学級委員長だからです。私にも、学級委員長としてのプライドがあります。……負けられない戦いがそ（略）！

「ミユキ先輩、確かに、私の手の平には何も握られていません。それは事実として、潔く認めましょう。……ですが。」

私は、静かに切り出しました。

～第七章に続く～

～第六章からの続き～

「何よ、今更何だって言うのよ！」

「……先輩、分かりませんか？私を見て、何も気付かないのですか？」  
はあ、とわざとらしいため息をついて、やや語気を強めて、私は続けました。

「確かに、先輩にはお分かりにならないでしょうね。……そんな時代錯誤の金髪ワンレンを、今時、静香さながらに執拗にかきあげ……ましてやミニ全盛期の今、セーラー服のスカートをそんな風にマキシ丈で履いているような先輩にはね……っ！」

「……っ！ア、アンタ、このアタシに喧嘩うってんの？！そんなに痛い目見たいって言うのならっ……」

とっさに左手をスカートのポケットの中に突っ込み、何かを探る様子のミュキ先輩。

「ふふっ。どうせそのポケットの中にはカミソリの刃が一枚、いいえ、二枚程入れられているのでしょが、こちらにはとっくに全てお見通しですよ、ミュキ先輩。……まだ分からないのですか？今日日、そんなファッションは流行らないということ！」

「くうっ……！」

唇を噛み締めるミュキ先輩に、今度は私が攻め込む番です。

「それでは委員長たる私が、先輩に教えて差し上げましょう。今年の流行りは、“オールインワン”に“ダンガリー”、そして……。」

「……そ、そしてっ!？」

「……そしてこれ、ヘッドアクセサリーです！……ねえ、先輩。黒字に程よくゴールドの文字のアクセントが効いた、存在感満点のこの私のヘアバンドを、今こそ良く見てみて下さいな……。」

「……ド、DOLCE&GABBANA……小娘のくせに生意気にD&G……はっ、なにっ!？……もしやそれはっ……！」

……勝負ありました。

勝ちを確信した私は、今までとはがらりと口調を変えて、そっと優しく、ミユキ先輩に語りかけました。

「……そう。何を隠そう、私がおく自然体で頭につけていたこのヘアバンドは、我がクラスの問題児、家入君が校則を犯してまで入手していた謎のパンツの、ゴム部分です。ハサミでドーナツ状に上手くカットしましたので、一見、なんの遜色もないヘアバンドに見えたはずです。……あまりにさり気ないのでお分かりにならなかったかもしれませんが、ミユキ先輩、どうかご理解ください……学級委員長とは、そういうものなのです。」

半開きにした口元をわなわたと震わせながら、何か汚らわしいものでも見る様なぎょっとした目で、こちらを凝視するミユキ先輩。ミユキ先輩の気持ちを思うと、何だか少し可哀想な気になりましたが、そこは気持ちを鬼にして、私は話を続けました。

「……裏番である先輩の様に、児童の財布の紐を握り、陰で強引に恐怖政治を敷く。確かに、その様な手法を用いれば、あなた自身は何のストレスも抱えることなく、クラスを統治することができるかもしれません。……そして私は、決してそれが悪いとは言いません。何しろリードつきの首輪をつけられ、四つん這いにされ、背後から鞭打たれたり蠟を垂らされたりすることを、むしろ好む児童もいると聞きますから、結局のところお互いの利害関係が一致してさえいれば良いのだと思います。」

そこまで言ってちらりとミユキ先輩に視線をやりますと、先輩はポツと頬を赤らめ、すぐさま私から目をそらしましたので、そういうことなのだとして理解をし、更に話を続けました。

「……ですが、我がクラスの問題児はと申しますと、さすがにそこまでのことは好みません。また、何より、私は学級委員長です。私が目指すべきゴールは、私が好きな様にクラスを統治することではなく、クラス全員がストレスなく、穏やかな気持ちで、健全な学校生活を過ごせること。そのために私がすべきことは、問題児の財布の紐を固く握ることではなく、むしろ問題児が大切にしているパンツのゴム部分をヘアバンド代わりに頭に飾り、あなたのことをいつもこんなにも思っていますよ、そして、もう二度と隠れて高級パンツを買ってははいけませんよ、と、至って平和的に、友好的に、そしてファッションナブルに訴え続けることに、他ならないのです。……ミユキ先輩なら、分かってくれますよね……？」

ミユキ先輩は、終始うなだれ、私の話を聞いているのかいないのかといった状態でしたが、私が最後まで話し終わったとき、か細い声でそっと、呟きました。

「……わかった、負けたよ。」

爽やかな夕方の風が、ミュキ先輩の長い髪をふわりとなびかせ、吹き抜けて行きました。

「……あーあ。この夏は、アタシも挑戦してみよっかな、その……ヘアバンドってやつにさ……。」

先生、最後にそう言い残して、静かに去って行ったミュキ先輩の後ろ姿はとても凛々しく、輝いて見えました。

それでは今日は、この辺で。

学級委員長、家入明子。

先生、あのね。八

---

■先生、あのね。

先生、先生ならきっと覚えておいででしょう、あの、約七年前の夏の日のこと。

「.....お客さん、一言、言わせてもらっていいですか。」  
という、あってないような前置きで、乗り込んだばかりのタクシーの運転手さんから突如告げられた驚愕の一言。

「あなたは、決して美人ではありません。」

それは、あまりにも迷いのない、清々しいまでの暴言でございました。激しく動揺した私に運転手さんは更に畳み掛けます。

「あなたは決して美人ではありません。.....決して、美人ではありません。」

同じことを妙に抑揚を変えて三回も言わせる前に、なんで一発殴ってやらなかったのかと、すぐさま猛烈な怒りと後悔にかられ、いやむしろ今からでも遅くないかな、と膝の上の荷物を脇に移動しかけたところで、運転手さんはこう付け加えたのです。

「だけど、あなたは人を豊かにする」

.....その話し、聞こうじゃないの。私は荷物を再び膝の上に納めました。

「あなたは決して美人ではありません。けれどあなたの学級の問題児は本当に幸運ですよ。あなたは人を豊かにしますから、きっと末永く幸せな学級を築くことでしょう。」

畜生っ！もう一度言いやがったな！！.....いえ、不適切な発言を訂正いたしますと、”大変恐縮ではありますが、さながら畜生の様なあなた様、もう一度おっしゃいましたね？”です。最初の一言にはやはりそんな憤りを感じ得ませんでした。悔しいかな、どこことなく興味をそそられるその話しに、私が黙って耳を傾けておりますと、運転手さんは更にこの様に続けました。

「.....ただ、あなたは人がいいから、つい我慢してしまうでしょう。男というのは悲しいもので、どんなに今が優秀でまじめな生徒であっても、きっとこれから先、一回や二回、間違いを犯す

ものなんです。それでも、あなたは我慢して、許してしまう。そうやって、学級の平和と秩序を守っていくんです。」

一体全体、何者だというのでしょうか、まるで全てを見透かしたかの様に言う運転手さん、最後に一番大切なことを教えます、と言って、おもむろにこう付け加えました。

「男が間違い犯さないようにするためには、あなたが”マグロ”にならないことです。受け身でばかりいてはいけません、学級の中でも刺激は大切です。ベッドの中でマグロにさえならなければ、大丈夫！」

あろうことか驚愕の下ネタでオチが付いたために、長らくそこはかたない胡散くささと共に、私の記憶の奥底に閉じ込められていた昔話。……先生、そんなことを何故私が今、また、思い出したかのように記しているのかと申しますと、先日、我が校きってのスピリチュアルカウンセラーで、本業は美術史担当のジャスティン先生がふいに、少しばかりこれと似たようなことを、私に仰ったからです。

「委員長、君の大きなエネルギーを、委員長の学級のイエイリ君が見事に吸収して、彼のエネルギーに変えているんだ。」

更に、このジャスティン先生のカウンセリングに、かねてよりの私の友人であり、美人で聡明、高校時代にはタクシーチケットをノートで持っていたという伝説の帰国子女・ケイコが、後日、こう付け足しました。

「……ええ、確かに、委員長は大きなエネルギーを持っている。けれど、残念ながらそれは、あなた一人では世に出せないものなのよ。委員長が持ち前のエネルギーを活かすには、媒介となる人が必要なの。そしてそれが、家入君なのよ。」

先生、そもそも我がクラスの周辺の予言者出現率の高さに驚くばかりですが、彼らの発言に不思議な共通点があることにもまた、私は大変に驚きました。つまり彼らは一貫して、この学級において、私は与える側であり、問題児である家入君は享受する側である、と言っているわけです。これは一体どういうことなのだろう、と考えてみたとき、私は思いがけず、ある一つの発見を

しました。

.....これってもしかして、“攻め”と“受け”、なのでは.....？

.....えっと、少し語弊を恐れなさ過ぎましたので説明させて頂くと、この場合の“攻め”と“受け”は決していやらしい意味のそれではなくて、腐女子的な何らかとかでは全くなくて、つまるところ世の中は、“与えることで与えられる人”、つまり“攻め”の人と、“与えられることで与えることのできる人”、つまり“受け”の人と、この二種類の人間で構成されているのではないか？ということなのです。

いやいやそこは持ちつ持たれつ、一人の人間がどちらの側面も持っているものだよ、と先生はお思いになるかもしれませんが、時には攻め、時には受ける、それこそが男の純愛、と仰るならば大変恐縮ではありますがそれは今回に限って大いに本筋からそれています。（これについては日を改めて先生の深い考察をお聞かせ願いたい所存です。）

確かに私たちは、相手や状況に応じて、この“攻め”と“受け”を無意識に使い分けて生活しています。が、私は文系、あなたは理系といったそれと同じく、実は人それぞれ、この“攻め”と“受け”に、得意・不得意、向き・不向きを持っているのではないのでしょうか？

それでは、例を挙げて考えてみましょう。先生は、周囲から人を紹介されることの方が多いのでしょうか、それとも、周囲の友人達に人を紹介をすることの方が多いのでしょうか？僭越ながら私が思うに、人とはエネルギーの塊、エネルギーそのものであるので、人を紹介することが多いという人は“攻め”タイプ。逆に、紹介されることが多いという人は、“受け”タイプです。.....モ一君、ピカチュウが電気タイプだという話は後でしましょう。

で、私は恐らく攻めタイプであるが故に、まず誰かに与えることをしなければなりません。その、ちょうど良い受け皿となってくれたのが、受けタイプの問題児ポケモン、家入君だったのです。

私のエネルギーを持ち前の吸収力で大いに吸収、搾り取れるだけ搾り取れるだけ搾り取って、今度は家入君がそれを、主に校外活動で大々的に発散。そうすることで再び彼に還元される新鮮なエネルギーを、今度は学校で私が享受する。これこそ、受けと攻めのバランスのとれた、素晴らしく理想的な循環型社会！

.....が、本来我がクラスに構築されるはずでありましたが何かどこかで不具合を起こしているのでしょうか、還元すべきエネルギー（を持った当事者）が、やはり本日も未登校ですので私は今日も搾りカスのまま！

先ほどメールで届いた遅刻の連絡によると、「ごめんなさい、今、起きました」とのこと。どこですか、遅刻ですよ、と厳しく返信したところ、「ひがしやまさんとへんなしゃんぱんぱー」（全文ママ）。しゃんぱんぱー……って、メールですら呂律が回っていないのか、いやさては馬鹿にしているのかと思いきや”シャンパンBar”だそうで、それならそうと分かりやすくカタカナで書きましょう、と添削しかけたところに、再度メールが着信。

「委員長、いつもごめんね、あらがとう。」

内容が内容だけに、非常に惜しい言いまつがい。……惜しいけれども、決してそこは間違えてはいけないところだったので、「ふざけるな！」という私からの返信を最後に、家入君との本日のコミュニケーションを終えました。

……マグロ、だったかな……（遠い目）

それでは今日はこの辺で。

学級委員長、家入明子。

## 先生、あのね。九

---

■先生、あのね。

先生。

今日はサッカー一部の山根君と生徒会役員の服部君が喧嘩をしていましたので、学級委員長としてすかさず二人の仲裁に入りました。取っ組み合う二人を引きはがし、そもそも原因は何だったのかと尋ねたところ、山根君は言いました。

「委員長、俺は毎日グラウンド10週走ってるし、パス回しとシュートの練習に放課後3時間を費やしてる。それに朝にはドリブルの練習をかねて町内をボールと一周するんだ。だから間違いなく、服部より俺の方が大変な思いをしているっていうのに、服部はそれを認めようとしななんだ！」

すると、一旦は側で黙っていた生徒会役員の服部君が、顔を真っ赤にさせて言い返しました。

「お前は馬鹿だな！俺なんか毎日、どの生徒より早く学校に登校し、校門で挨拶運動をしている！それに放課後は毎日生徒会の役員会で話し合いをしているんだ！お前みたいにちゃらちゃらボールばかり追いかけるより、遥かに有意義なことをしているんだ！」

当然のことながらサッカー一部と生徒会は全く別の活動をする団体ですから、二人の頑張りの度合いは、比較対象にはなりません。よく考えればすぐに分かることですし、そもそもどっちが頑張っているかなんて、幼稚園児のように中身の無い議論です。

しかし先生、分かってください。山根君も服部君も、結局のところは自分の頑張りを認めて欲しかったのです。一見愚かに思えるこの二人のやりとりを、単に"ゆとり"とか、"幼稚"とか、そんな言葉で片付けてしまうわけにはいきません。毎日頑張っているからこそ、努力を認められたいと願うのは、至極当然のことです。誰もが皆、出来ることなら、良く頑張ってるね、偉いね、凄いねって、誰かに言ってほしいのです。

お母さんと繋がっていたお腹の中から、ある日突然外に出された、その瞬間から、自分は自分一人ではなくなってしまったので、私たちは生まれながらに寂しさ、心細さを知っています。寂しく、心細いがために、誰に教えられてもなく人と繋がりをもつことを覚えます。人との繋がりの中で、ほんの少しでも自分を肯定してもらうことで、私たちの寂しさ、心細さが払拭されるからです。けれども、そうして得られる安心感、連帯感は、決して永続的なものとは限らないので、私たちは人と出会い、認め合い、安心し合うということを、一生のうちに何度と無く繰り返します。

学級とは、その延長上に存在します。

他者との間でやるそれよりさらに深く認め合い、慰め合い、理解し合える相手と、私たちは学級を作ります。ただそれだけであれば”自分”という一人の人間を、気の合う人と共に、あえて小さな学級という箱の中に収める、そうすることで私たちは、自分が一人ではない様な気持ちになれるし、雨風をしのぐ様に、寂しさや不安といった負の感情から身を守れる様な気になるからです。

ところが先生、負の感情を払拭し、安らぎと心強さを育むはずだったこの教室の中にも、孤独はいつだってちゃんと存在していたのです。

学級という偽葉がきちんと作用している間は、クラスメートといえるのだからそんなことは起こりえないと思う。ほんの少し落ちた陰ですら、錯覚だと思い込むことが出来る。けれども、どんな箱の中にいようと、私が私一人であるという事実が変わりはなく、また、誰といようと、相手が他人だという事実が変わりはないのです。

このクラスが出来上がったばかりの頃、私達は見たくないものの前に、力を合わせて大きな土の壁を作りました。そうして、見えなくなったことで安心し切っていたから、いつしか時間とともに土の壁が崩れてしまっていたことにすら、誰も気がつかなかったのです。

私は学級という箱の中で、本当は随分前から孤独でした。けれどもそれと同じだけの孤独を、あの人もまた、長い間、抱えていたのだらうと思います。

今朝、教室の換気をしようと窓の側に立ったとき、ベランダに一匹の大きな黄金虫を見つけました。随分弱っていた様で、私がベランダに出て、すぐ側を歩いても、黄金虫はただその場でもそもそと足を動かすばかりで、飛ぶ力もない様でした。黄金虫はしばらく、そのままベランダに留まっていたので、可哀想に、このままここで死ぬのかな、と思いました。ところが、私が再び教室に戻り、窓を閉めたその直後に、ベランダの方からかさっ、かさっという大きな音が聞こえてきて、何事かと思わず振り返ると、先程の瀕死の黄金虫が驚く程高く飛び上がっていて、空中から何度も、何度も、窓ガラスに体当たりを繰り返していたのです。それでふと、あの黄金虫は、教室の中に入りたいのかな、と思いました。けれども、そんなことを考えているうちに、黄金虫はいつの間にか遠くの方へ、飛んで行ってしまいました。

学級委員長、家入明子。